

## 英国の服装文化を訪ねて : 第10回国際服飾学会 議報告と服飾博物館研修

著者	泉山 幸代
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	26
ページ	165-178
発行年	1991
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00001643/">http://id.nii.ac.jp/1136/00001643/</a>

## 英国の服飾文化を訪ねて

### —— 第10回国際服飾学術会議報告と服飾博物館研修 ——

#### Visiting Costume Museums in Great Britain

泉 山 幸 代

Sachiyo IZUMIYAMA

### I は じ め に

このレポートは「北海道女子短期大学特殊研究海外研修規程」に基づく研修者として、第10回国際服飾学術会議出席と英国服飾博物館研修の機会を与えられたので、その研修内容を報告するものである。

会議は1991年7月27日より29日まで、英国のバース市にて開催された。バースでの開会にあたっては、バース服飾博物館キュレーターのペネロフ・バード氏と国際服飾学会との1年間にわたる、ファックスを駆使しての御尽力により実現したものである。会議第一日目の夕刻にはバース市長主催のレセプションに招待をいただくなど、町をあげての歓迎を受けた。

会議後の7月30日から8月9日まで、英国の各都市に服飾博物館を訪ねる調査旅行に参加した。5年前に初めて服飾博物館を訪れたときの感激から、いつか質量ともに優れている英国内の服飾博物館を訪れたいと思っていた。欧米における歴史的服飾品に対する考えは、美術・工芸と同等のレベルで考えられ、生活美術或いは応用美術として捉えられている場合が多い。従って保管状況の良い服飾遺品を有する博物館及び、美術館コスチューム部門は非常に充実しており、多様な方法で展示されている。今回の調査旅行では博物館キュレーターの方々から、懇切な説明とともに、資料室に収蔵されている歴々の服飾の保管状況見学という、願ってもない機会も得た。

本報では国際会議の内容要旨と、調査旅行で訪れたいくつかの服飾博物館について見聞した研修内容を報告する。

### II 第10回国際服飾学術会議報告

バースはロンドンから真西へM4高速道路を約2時間余り車で走ったところにある。エイボン川に沿った丘陵地に造られた、こじんまりとした美しい町である。ここは古代ローマ人がイングランドを領土とした際湧き出る温泉を発見し、この地に浴場を造った。現在もなお、1日に200万リットルを越す豊富な湧出量を示し、当時のプールのような大浴場跡は保存され名所となっている。英語で「風呂」を意味する bath はこの地名に因んでいる。18世紀に入ってこ

の町は優美なジョージア朝の建築で埋められ、英国上流社会の保養地として急速に発展した。バースは英国のパリといわれるほど、ロンドンとともに社交の中心地となった。そのため、社交場としていくつかの建物がつくられた。第10回国際服飾学術会議は当時上流人が集まったアセンブリー・ルームの一つ、現在はバース服飾博物館となっている旧貴族の館で行われた（写真1）。



写真1 バース服飾博物館

### 1. オープニング・セレモニー

バースでの国際服飾学術会議は、国際服飾学会丹野郁会長の開会の辞で始まった（写真2）。その中で本会議の準備のために、ご尽力下さったバース服飾博物館キュレーター、ペネロフ・バード女史及び、絶大な協力をいただいた英国服飾学会に対し謝辞を述べた。次いでバース服飾博物館館長ステファン・バード氏の歓迎の辞とならびに、バース市の歴史とバース服飾博物館についての説明があった。来賓の英国服飾学会会長ジェームス・スノーデン氏は、祝辞とともに英国服飾学会の歴史と現在の活動について述べた。続いて今回参加できなかった韓国服飾学会会長、ならびに中華服飾学会名誉理事長の祝辞の代続が行われた。最後にアメリカメトロポリタンコスチュームギャラリー、キュレーターJ、デュルーズドゥー氏、ポルトガル本部学会顧問のN、ゲーデス氏他よりの祝電が披露された。

### 2. 基調講演「The Devil's Fashion」 ジャネット・アーノルド氏

ロンドン大学・ロイヤルハロウェイ単科大学教授

服飾研究家として著名なジャネット・アーノルド女史を迎えて、約1時間30分にわたる講演を拝聴した（写真3）。女史は「Patterns of Fashion」の著者として有名である。また国際服飾学会の顧問として協力をいただいているとの



写真2 国際会議開会式にて

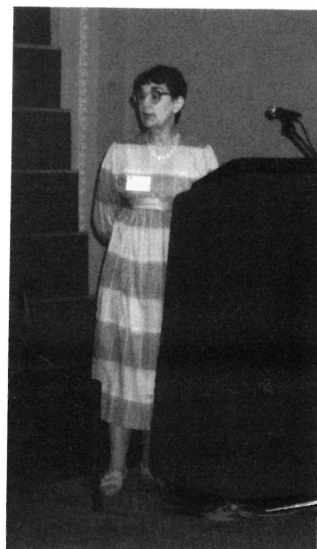


写真3 J. アーノルド氏

紹介があった。約50枚のスライドを準備されての講演内容要旨は次のとおりである。

1540年から1630年にかけてヨーロッパ、特にイギリスで流行したネックラインについて概観する。本研究はシャツやスモッグの衿ぐりについた小さなフリルから、あのラフへ発展する過程をたどろうとするものである。1560年代、衿のフリルは次第に8字形に変化していった（写真4）。また女性のラフの最初は、服の上に縫いつけていたが、だんだんラフだけ離れたものとなり、糊付をして首のまわりに立つものになった。

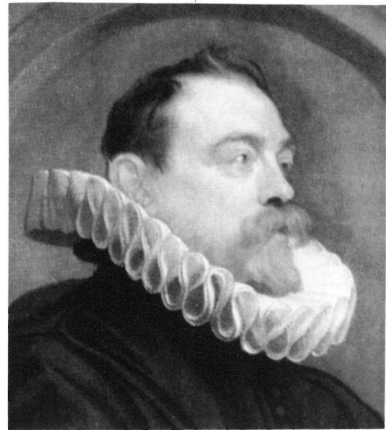


写真4 8字形のラフ

ラフは非常に複雑のようにみえるが、当時のラフを実際にはどいてみると、長方形の長い布に細かくギャザーをよせてプリーツをとって作ったものである。プリーツの数615本というラフもある。細かなプリーツをとれるのは当時の縫製技術の高さを示すものであろう。

そしてラフの型を美しく保つためにどのようにしていたのか。始めは衿つけ位置の内側に堅い麻布をつけていた。次第にラフ専門の洗濯人が現われ、糊付をして型を整えていた。さらにプリーツの先にロウをつけてよりしっかりとしたものになっていた。この糊付技術は相当に難しいものだったらしい。当時のラフの裏側には洗濯屋のマークが残されており、それだけ糊付技術の熟練を示すものであろう。また衿の内側にワイヤーをいれてサポートしているものもあった。



写真5 レースのラフ

しかしラフは雨や湿気にあたると垂れ下がる。そこでラフを立たせるために多数のピンを用いて留める方法がとられた。英語で夫から妻へ渡す小遣いを“pinmoney”というが、これはラフのためにピンを購入する際の代金の意味が語源だといわれている。

1590年代、ラフはより装飾的になる。幅広くなり、後のラフは後頭部にぴったりつけて着装したり、二重になったりと様々なバリエーションをみせてきた。素材は非常に薄い麻地や絹が用いられ、レースや刺繍などの装飾がつけられた（写真5）。

私がラフの複製をした経過は次のとおりである。極薄の麻地を用い、当時のラフの型と同じになる

\* ラフ 16～17世紀に用いられたものでひだをとってフリルを糊付してカフスとして首まわりにつけたひだえりのこと



ように長方形の布を接いでいったが使用布は17mにも及んだ。円柱の筒（首まわり寸法と同寸程度）にプリーツが平均になるように三重にして巻いていったが、それは700本以上のプリーツとなった。ここで最も困難であったのは糊付である。当時も糊付加減は非常に難しいと記録にも残されているが、実際に手掛けてみてよく判った。

1540年代には、ラフをつけなければ宮廷にもいけないほど熱狂的に流行したラフは、約60年間続いて1630年頃に忽然と姿を消した。

この「The Devil's Fashion（悪魔のファッション）」はピューリタンとして巨大なラフの流行へ強硬に異義を唱え、「ラフは地獄の土宇への直行路へ導くものだ」と言った。Phillip Stwbbbersの言葉からとったものである。つまりピューリタンは自然のままに生きる。簡素な生活を心がけているのに対し、優雅でまして糊付までしてあるラフが流行したことは「悪魔がゆ惑するファッション」であり、地獄への最短距離であるとラフを非常に嫌っていたのでこのタイトルとなった。

「The Devil's Fashion」は来年マクミラン社より出版の予定である。

### 3. 講演「Fashion in Photographs 1880—1900」 サラ・レヴィット氏

ブリストル美術館キュレーター

S・レヴィット女史は、1880年から1900年までの写真から、この時代のファッション史及び社会史に関しての研究をされている。スライドを準備されての講演内容要旨は次のとおりである（写真6）。

私の著書「写真に見るファッション1880—1900」（Botford社）は4部作からできているが、もうすぐ出版の予定である。この本には時期ごとに150枚以上の写真が集められ、1880年から1900年に着用された種々様々の衣服が掲載されている。これらはロンドンの国立肖像画公文書館にある10万点を超える写真や、ネガフィルムから私の著書には主として、まだ出版されていない写真を使用した。その中には歴史上の有名な人物の他に様々な職業、階級の人々の写真も入っている。こうした人達の地味で実用的な服装は、上流階級の人々が着用した高価な生地を使った実際的でない衣服と対照的である。各々の写真には解説がついており、衣裳、アクセサリーの説明のみならず、どのようにその衣服が作られ、着心地はどうか、洗濯の方法、保存法にいたるまで記述されている。

この講演では150枚のうちから当時の珍しい写真20枚をお見せすることにする。1884年の皇室の写真は珍しいスコットランドの山歩きの写真である。当時のスポーツウェアをみることができる。1890年代のロンドンの歌手ヴェル・ヴィルトンが着用しているイヴニング・ドレスには新しい発見がある。それは英国史上初めて袖のない肩を出したドレスだからである。



写真6 S・レヴィット氏

1890年代の女性のファッションの特徴は袖と肩が幅広になるなど、男性の服装をとり入れたものが目立ってきた。活動的なファッションに変化していく気兆しをみせている。

私はこの仕事のため、残されている当時の日記、ファッション誌、新聞からの引用文や、逸話、その他ヴィクトリア時代の重要な出来事などの研究も進めている。

#### 4. 研究発表

詳細は、学会誌に掲載される予定なので要旨のみを紹介する。研究発表は7件であった。今回の研究テーマは「東西の服飾文化交流」「自由テーマ」であった。

1日目は景平一恵氏（日本 共立女子大）の「近世における日本人の服装感の変容 — 宣教師の影響を中心に —」から始められた。景平氏は16世紀半ばに渡来したキリスト宣教師達の布教から、日本人はいかなる影響をうけ、何を吸収したのか。その服装感の中で現存する大石家の伝来衣裳類や、いくつかの庶民衣服の西欧衣服的な特徴から、特にボタンと眠り穴ボタン・ホタンホールが、西欧文化が日本衣服文化にもたらした典型的な特徴の一つであると報告した。次に塚越道子氏（日本 女子美術短期大学）の「服飾に見る東西文化交流 — はきものを中心に —」は、日本の下駄の文化に対する、トルコのタクシヤと呼ばれる高下駄のルーツと変容を述べ、西欧文化との接点について考察した。引地加寿恵氏（日本 東京家政大学）は「自動縫製システム — 通産省工業技術院大型プロジェクト —」について、ビデオ放映にて報告した。これは1982年より研究開発が行われている、現在世界のトップレベルにある日本の自動縫製システムを紹介するものである。出来上った作品も会場内に展示された。

2日目は木野内清子氏（日本 大学女子大学）の「帯の変容 — 女帯 —」は、小そでの表着化に伴い、実用のひも帯から装飾性の濃い広幅帯への女帯の変容を通して、室町後期から現在に至る女子服飾を考察した。続いて呉麗嬌子（台湾）の中国肚兜の刺繍法とその国案色彩の研究」では実物作品を展示して中国民服トウトオの刺繍技術と、国案紋様の色彩、配置について述べた。陳曉冉氏（台湾）の「台湾の婦人服飾百年史」は、幾枚かの古い写真をもとにして、台湾の歴史、政治、生活などと対照して、現在までの一世紀の間、台湾婦人の衣服に対する着装の心理変化を考察した。金美子氏（韓国）は「1302年阿彌陀佛服装服飾と織物に関する研究」と題して、阿彌陀佛内の腹蔵物のうち服飾と織物についての変容を述べた。

#### 5. バース市長主催レセプション

7月27日、会議第一日目の夕刻、バース市長主催の歓迎レセプションに、会議参加者全員が招待状をいただき会場のグランド・パンプ・ルームに向かった（図1）。和服を着られている方もおり、また台湾の方は中国服を韓国の方はチョゴリを着用されて、民族色豊かな美しい衣裳は夕闇に映えて、より一層美



*The Mayor and Mayoress of Bath*

(Councillor Denis and Mrs. Daphne Lovelace)

request the pleasure of the company of

*Mrs. Igumiyama Sachiko*

at a Reception in The Pump Room, Bath  
on Saturday, 27th July, 1991

on the occasion of

THE INTERNATIONAL ASSOCIATION OF COSTUME 10th ANNUAL CONGRESS

8.00 p.m. Reception  
8.45 p.m. Dinner in Pump Room  
10.30 p.m. Carriages  
Lounge Suit

Please present this card.

図1 招待状



写真7 ローマン・バスにて



写真8 バース市長主催レセプション

しく人目をひいた。行く道々には花が美しく植えられており、目を楽しませてくれる。窓際や、ショーウィンドーの片隅にもこのような飾り方もあるのかと感心するほど調和よく飾られている。ユネスコから、世界で花の美しい町の一つに選ばれているとか手入れもよくゆき届いている。午後8時近くになってもまだ陽は沈まない。ローマ時代そのままに保存され満々と温水をたたえるローマン・バスの囲りで歓迎のセレモニーが行われた(写真7)。C・Denis バース市長は「この美しく、そして服飾博物館を有するバース市での国際会議の開催を非常に喜んでいる」との歓迎の挨拶があった。その後隣りにある18世紀末に建てられた当時の社交場パンプ・ルーム移動しての夕食会となった(写真8)。そこからはローマン・バスが見下すことができ、ローマ戦士の彫像には赤々と火が灯り、ふと2000年前と同じ光景ではとってみたり……。時が経つのを忘れるほどに談笑が続き、なごやかな雰囲気の中で終了した。

### Ⅲ 英国の服飾博物館を訪ねて

今回の研修旅行ではイングランド、ウェールズ、スコットランドの各都市にある、以下のような服飾博物館及びコスチューム、タペストリー関係の美術館を訪れた。(服飾関係以外の美術館及び、教会、城、宮殿に附属した見学研修地については省略した)但し紙面の関係上、博物館学芸員に説明を受けた服飾博物館について、その概要を訪問順に述べる。

#### 1. 研修地及び博物館

(◎は報告箇所)

○バース ( Bath )

◎バース服飾博物館 ( Museum of Costume Bath )

・アメリカン博物館 ( American Museum )

・ホルブルン博物館 ( Holburne Museum )

○エクセター ( Exeter )

- ルージュモンハウス服飾及びレース博物館 ( Rougenont House Museum of Costume and Lace )
- ロイヤル・アルバート・メモリアル美術館 ( Royal Arbert Memorial Museum )
- ホニトン ( Honiton )
  - ホニトン民族博物館 ( Allhallows Museum Honiton Devon )
- カーディフ ( Cardiff )
  - ウェールズ国立博物館 ( National Museum of Wales )
- マンチェスター ( Manchester )
  - ウィット・ワース・ギャラリー ( Whitworth Art Gallery )
  - ◎プラット・ホール美術館 ( Platt Hall Museum : The Gallery of English Costume )
- ヨーク ( York )
  - ヨーク城博物館 ( York Castle Museum )
  - キャッスル・ハワードコスチュームギャラリー ( Castle Howord Costume Galleries )
- エジンバラ ( Edinburgh )
  - スコットランド国立美術館 ( National Museum of Scotoland : Costume )
  - ロイヤル・ミール・リビング・クラフトセンター ( Royal Mile Living Craft Centre )
- ロンドン ( London )
  - ◎ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館  
( Victoria and Albert Museum : Dress, European Textiles and Embroidery )
  - ◎ベスナル・グリーン博物館 ( Bethnal Green Museum )
  - ロンドン博物館 ( Museum of London )
  - ◎ケンジントン・パレス ( Kensington Palace : Court Dress Collection )

## 2. バース服飾博物館

キュレーター、P・バード女史の説明で見学が行われた。この建物は1770年、当時の有名な建築家ジョン・ウッドによって建てられたアッセンブリー・ルームである。“Assenbly”とは社交的集いのことを意味し、ここでは保養にきた上流社会の人々の社交の場として華やかな舞踏会が催されていた。勿論、博物館内にはこのアッセンブリー・ルームにきた時に着用された18世紀初めから中頃のドレスも残されている。第2次世界大戦で被害を受けたが、戦後完全に修復され、1963年5月から服飾博物館として公開されている。また1990年から1年間休館して改装をし、91年4月に新装となったばかりである。

1950年、英国随一の衣装コレクターとしてまた歴史家でもあったドリス・ラングレー・ムーア夫人は世界的に知られた永年のコレクションをバース市に寄贈した。収蔵品はムーア夫人の衣装コレクションを基盤に、以後多くの人達からの寄贈で増やされ、英国だけではなく、ヨーロッパ全体の代表的な服飾品が収集された。とりわけファッショナブルなものが多いのが特徴である。

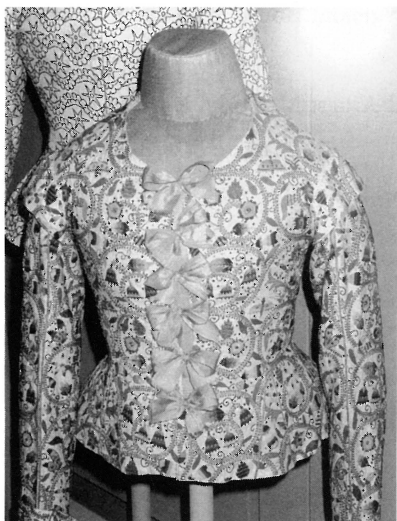


写真9 1610年頃の婦人用のダブルレット

16世紀後半から現在に至るまでの服飾品の中で、1610年頃の婦人用のダブルレットは、金系刺繍も当時そのままに完全な型で残されているのがひとときわ珍らしく、加えて当時の刺繍師の技を示す緻密な手刺繍も（写真9）見事である。

展示は各時代のファッションを中心に、靴、帽子、扉や宝飾品などのアクセサリ類や、刺繍服飾品や、下着などの収集も、また王室関係の儀式用衣裳も豊富である。

この服飾博物館の1820年から1930年までのファッションの展示方法は極めてユニークである。できるだけありのままの状況で再現することを重視し、10年ごとに区切って、当時の状況をパノラミックに、或いは室内の雰囲気を実感できるように作り出し、その中に往時の服装をしたマネキンが置かれている（写真10）。18世紀のバースの保養地としての背景を描いたパノラマもあり興味深い（写真11）。他の服飾博物館には見られないほどの細慮による状況設定に、当博物館のポリシーがうかがえる。

館内には展示してある服飾品の他に約2万点の収蔵品がある。今回収蔵室に入り、保管してある収蔵品を見せていただくことができた。収蔵室に入るとおびただしい量の箱が、ラベルをつけて整然と棚に置かれている。光は収蔵品の最大の敵であるので窓は遮断されている。ただたんで保管できるものは箱に収納し、比較的保存状態のよいものはつり下げて置くという（写真12）。



写真10 1830年代の展示



写真11 18世紀のバースを背景に

ここで1850年代の保存のよいディドレスを見せていただいた。縫製は勿論手縫いである。縫い代の仕末、鯨のボーンのいれ方、ダーツの縫い方、カートリッジ・プリーツの作り方など現在の縫製とは異なる19世紀中頃の技法は興味深く、学ぶところが多かった（写真13）。なお復元の為に現在は、保存状況のよい化繊糸を用いているとのことである。

### 3. プラットホール美術館イングリッシュ・コスチュームギャラリー

マンチェスターは人口45万人の都市である。イングリッシュ・コスチューム・ギャラリーは、マンチェスター市のアート・ギャラリーの一部門にあたる。キュレーター、A・ジャービス女史から説明をうけた。1762年マンチェスター市が買い上げた、18世紀の面影をより多く残す建物に、カニングトン夫妻の個人収集に



写真12 収蔵室にて

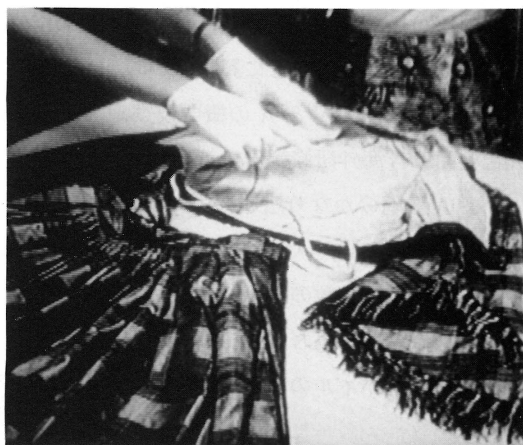


写真13 1850年のディドレス



写真14 1860年の Croquet Dress

よる服飾品を基盤にして1947年に開催された。このギャラリーの大きな特徴は個人のコレクションによるものということである。服飾に捧げた一人の人間の情熱が感じられ私にとって心に残る博物館となった。18世紀以降から20世紀までの英国の中層階級の人々の服装を含む婦人衣裳を中心に構成されている。多くの服飾博物館が素材、仕立ての面で質の高い衣裳を収集している中で、ひとときユニークである。またコスチュームのコットンプリント模様が、当時の捺染の多彩な技術をよく表わしている。

印象に残った作品をあげると、1860年の Croquet Dress の美しい装飾は見事であった（写真14）。黒白

のストライプ模様のウール地のスカートの裾には、黒のベルベットと赤のウール地で機可学模様のアプリーケがつけられている。その図柄、配置に抜群の洗練さを感じる。黒のウールのジャケットには黒と黄色のシルクのフリンジが、袖口、裾につけられ愛らしい。1859年から1862年にかけて流行した、シニョンネットのついた黒の小さな帽子がアクセントとなっている。大胆な色の扱い方、幾可学模様などに漸新な感覚が感じられる作品だった。

個人の収集より出発した美術館だが、18世紀から20世紀の作品については、英国内においてヴィクトリア・アンド・アルバート美術館に次ぐものだという。

#### 4. ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（以下V&Aと略記）

V & A は二度目の訪問だが、初めて訪れたときと同様にその広さには圧倒されてしまう。番号のついた展示室だけでも145室あり、次の目的展示室にいくまでに案内図を見ながら移動しても、その迷路のような廊下を巡りながら、広い森の中をさまよっているような錯覚を起こす。同館がその収集について、世界最初にして最大の工芸館であると自負することも納得できるわけである。それほどに興味深い陳列室が何と多いことか。いつかゆっくりと鑑賞できることを願っている。V & A の概要及び、Dress Collection については、北海道女子短期大学研究紀要第20号海外研修報告に筆者が述べているので省略する。

V & A 2階のかなり広さの95～101、107展示室はヨーロッパの織物、イタリア・フランス・フランダースのレース、染織、英国の刺繍など約10万点に及ぶ資料が展示されている。染織や刺繍などの膨大な数の織物片はパネル形式にして、年代順に整理され見やすく保存されている。また光線によって傷むことのないようにとの配慮であろう。パネルの収納庫が4個置かれ、見



写真15 V & A 収納庫引き出し

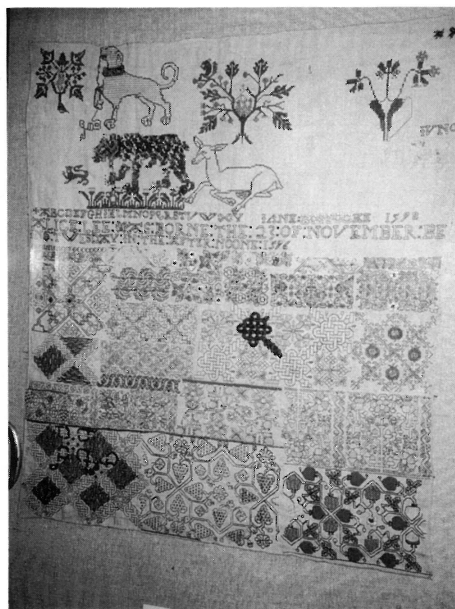


写真16 1598年のサンプラー

\*\* サンプラー 多様な模様のモチーフや刺繍ステッチの見本を1枚の布にほどこしたもの



学者は自由に引き出して見るができる  
る(写真15)。

○パネルに納められていた1598年のサン  
プラーから(写真16)

ユーモラスな4匹の動物や、花柄、機  
可学模様と楽しい図柄のサンプラーで  
ある。麻地に金糸、銀糸、多色の絹刺  
繡糸で刺されており、真珠や、黒ビー  
スで飾られている部分もある。サテ  
ン・ステッチ(以下Sと略記)、チェー  
ン・S、ボタンホール・S、コーラ  
ル・S、コーチド・ワーク、及びフ  
レンチ・ナッツ技法が用いられている。

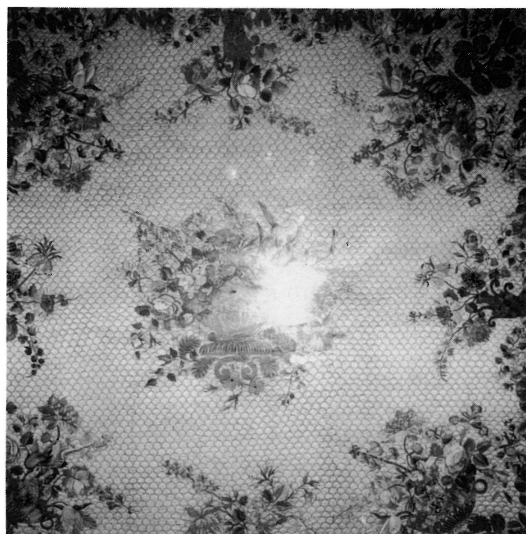


写真17 1717年の Coverlet

○1717年の Coverlet から(写真17)

Lord Digby 嬢が作ったものとの銘記がある。かなり大きなベッド・カバーである。銀糸で  
キルトされたサテン地に金箔された糸、多色の絹糸を用いてステム・S、サテン・S、ロ  
ング・エンド・ショート・S、フレンチ・ナッツ、コーチド・ワーク、レーズイド・ワー  
ク技法で刺されている。細かく丁寧な手仕事によって豪華な作品となっている。18世紀の特  
徴である写実的な草花のモチーフが生き生きと描かれている。

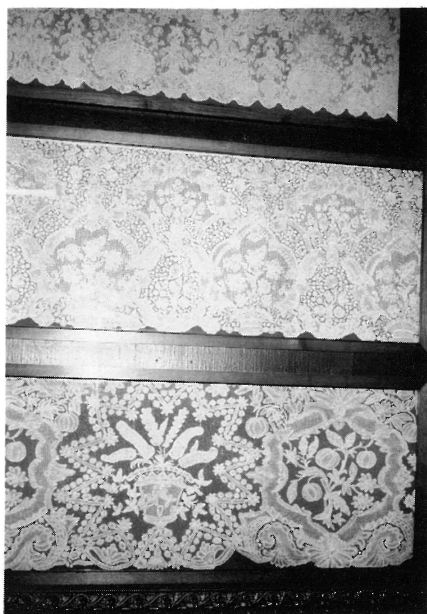


写真18 V & A 収蔵レース

レースは、ボビンレース、ニードル・ボイント  
レースなどの様々な種類、技法のものが展示さ  
れている。またポワンとよばれた縁取り用のレース  
は、かつて服装を特徴づける重要な装飾として用  
いられたため収集も多い(写真18)。レースは見  
るたびに柔軟な優雅さを感じる。しかし或るとき  
には、宝石よりも高価であったといわれるレース  
群をみていると、量りしれないような神秘性をも  
含んでいるかのように思えるのが不思議である。

なおキュレーター、アプリル・ハート女史から  
ドレス部門の説明を受けた(写真19)。展示され  
ている200点の衣裳から18世紀の、ひときわ目を  
惹く2着の女性用宮廷服は再度見ても感嘆するば  
かりである。それぞれの時代の特徴ある衣裳の説  
明をうけながら、前回の見学にも増して V & A  
の収集の豊富さ、質の高さに驚かされる。



### 5. ベスナル・グリーン博物館

ロンドン東部、テムズ川の東側イーストエンドは、旧市街とは全く異なる庶民的な地区である。その一画に V & A の別館である、ベスナル・グリーン博物館がある。この博物館には1740年から現在に至るまでのウェディング・ドレス約50点と、同時期の子供服が展示されている。その他に1700年から1972年までの各種の人形が300点近くあり、また英国随一の人形の家のコレクションでも有名である。

見学時間が短かったため、とり急ぎコスチューム部門キュレーター、ノーリン・マーシャル女史の説明を受けた。ウェディング・ドレス作品を一点ずつ、ガラスのケースに入れるという特徴ある展示方法である。四方から見るできるので、バックスタイルの撮影も可能であった。印象に残った作品から産業革命後、日常着は簡単であったが、正装には細い胴と大型スカートのロココ調が好まれた。1782年の Sara Baddicott 嬢の結婚衣裳もロココ調のスタイルである。胸衣（ストマッカー）の立体感がある銀糸レースによる装飾は上品で優雅である（写真20）。1908年の Elaine Campbell 嬢のウェディング・ドレスは白のサテン地に、同色のコードによる身頃、スカート下部から引き続き裾にかけての装飾が美しく華麗であ

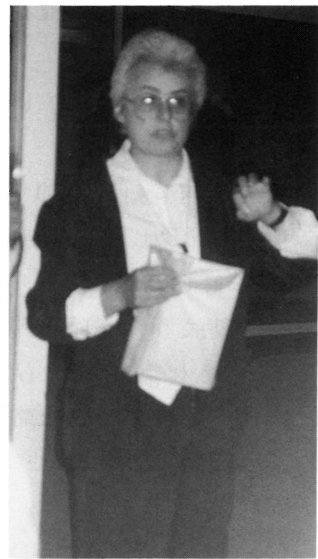


写真19 V & A キュレーター



写真20 1782年のウェディング・ドレス



写真21 1908年のウェディング・ドレス

る（写真21）。このアール・ヌーヴォー調の装飾を支えるため、白綿布が裏うちされている。

## 6. ケンジントン・パレス

### Court Dress Collection

ケンジントン公園の中には、1689年に建てられたケンジントン・パレスと呼ばれる美しい宮殿がある。1819年にはヴィクトリア女王がここで誕生され、現在はチャールズ皇太子の住むこの宮殿の一角に、宮廷服の展示室が設けられている。18世紀中頃から現在までの約100点ほどの展示である。陳列室に入るとすぐ右に、18世紀中頃の女子宮廷服が陳列してある（写真22）。この長い引き裾の優雅なマンチュア（略式宮廷用ドレス）は見る者の心を捉えるほどに気品があり美しい。髪には白いオーストリッチとレースのバルブ（垂れ飾り）が飾られ、大英帝国の繁栄を物語るように眩いほどに輝いていた。



写真22 18世紀の女性宮廷服

キュレーター、ジョアナ・マーショナー女史から次のような説明があった。男子宮廷服は次第に儀礼服（Uniform）に変化していくのが大きな特徴である。女子宮廷服には必ずオーストリッチの髪飾りと白の長手袋が必要とあったと……。

このケンジントンパレスの宮廷服の展示は、権威と伝統の象徴としての服飾が、歴史の中に生きているという実感があった。

## Ⅳ お わ り に

以上が英国にて研修を行った概要の報告である。帰国してわずかの期間で急ぎまとめたため、収集した多くの資料のうちの一部分の紹介であることをお許しいただきたいと思う。

国際会議への参加は、昨年東京で開かれた第9回国際会議に参加した際、次回はバースで行なう予定との連絡をうけたときから熱望していた。服飾に携さわる誰もがそうであるように、私も欧米の服飾博物館に興味をもちその内容を調べていた。特にバース服飾博物館は最も関心を寄せていたので願ってない機会を与えられたわけである。当地の人々からバース・カラーとよばれる、ネープルス・イエローに似た優しい色調に統一された美しいバースの町並は、国際会議参加という私の緊張感をやわらげてくれた。

国際会議の内容概要を紹介したが、集録したテープ、ビデオ・テープを何度かリプレイしてみても、和訳部分の難しさもあり、不明瞭な部分があることをお許しいただきたい。参加して期待以上に得るものは大きかった。特にJ・アーノルド氏の講演を拝聴できたことは、忘れられない思い出となった。服飾研究の大先達として女史の言葉は、私の心の中に大きく残っている。そして英国をはじめ、韓国、台湾、日本の学会員との交流を深めることができ、国情、習

慣、研究体制の違いを越えた、同じ服飾の研究者という実感があった。

会議終了後の調査旅行はバースからエジンバラまで約1800マイルをバスで走り抜けた。農業国であることがよく理解できるほどに、広大な丘陵にはどこまでも続く麦の穂、綿花を散らしたかのような羊の群れ、コッパー・ピーチとよばれる樺（ブナ）の巨木、ナショナル・トラストのマークでもある樫の木がひしめく大きな森、路傍には紫色のヒースの小花が風に揺れる。

英国には服飾博物館が大小あわせて約60あるという。そのうち主要な20箇所を訪れたわけだが、最も印象的だったのはそれぞれの服飾博物館の独自の姿勢である。その服飾品の収集過程、展示方法、保管状況、資料収集の違いは、それゆえに私達の装いに対する嗜好を満たし、見る者を感嘆させるのであろうか。さらにキュレーターの方々の熱意と努力である。多くの博物館には様々な文献・資料を集めた図書館があり、研究者、学生には収蔵庫での研究を許可し、場合によってはレプリカの指導も行なうという。

そしてフランスの影響を受けながらも、伝統と権威を示すものとして受け継がれてきた英国服飾の流れを、少なからず受けとめることができたと思う。

美しい田園地帯を走り、中世そのままの面影を残すチェスターやヨークの町を通りぬけながら、人々が自然の中にゆっくりと身を置き、素朴な暮しを堅実に守る様を垣間見て、ピューリタンの質素節約の生活信条に触れる思いがした。

今回報告した服飾博物館は、実際に訪れた博物館のうちの数箇所にすぎない。特に Honiton Deven のホニトン・レースや、ルージュ・モントギャラリー、キャッスル・ハワードギャラリーの作品群については、次の機会に違った角度から捉えてみたい。収集した資料が多く、まだまだ未消化の状態だが、その中から今後の新しい研究課題を模索したいと考えている。

報告を終えるにあたり、このたびの英国研修に御理解、御援助下さいました本学関係の皆様 に深謝申し上げます。

そして国際会議及び調査旅行において、多くの御指導をいただきました国際服飾学会会長丹野郁博士をはじめ、学会員の皆様に改めて厚く御礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1) English Embroidery, Victoria Albert Museum, 1970
- 2) The Gollery of English Costume Picture Book, Menchester City Art Gallery, 1963
- 3) Wedding Dress 1740-1970, Madeleime Ginebury, Majesty's Stationary Office, 1981
- 4) 世界の博物館 7, ビクトリア王立博物館, 講談社, 1979
- 5) DRESSSTUDY, Vol 5, 6, 11, 京都服飾文化研究財団

(1991, 9, 12)